

---

# アイドルマスター ~BattleGirls~

たけにゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイドルマスター～Battle Girls～

### 【ZINE】

Z9506Z

### 【作者名】

たけにゃん

### 【あらすじ】

いつもと変わらず始まつていくはずだった日常。

しかし、異世界への扉が開かれた時アイドル達は冒険の部隊へと引き込まれる

元の生活に戻るため、アイドル達は力を合わせて進んでいく

## ステージ1…はじまりは…（前書き）

作者は今回のアニメ放送があるまで通常のアイマスを知りませんでした。  
(ゼノグラシアのみ)  
そのため、多少設定等が違つていたりする事もあるかと思いますが  
ご了承くださいです

## ステージ1・はじまりは…

それはいつもと変わらない日常だった。

765プロダクション最大のステージを大成功で幕を下ろしてから数日…。

また、各自の仕事に忙しい日々が続いていた。

そんな中、事務所にて何かを見つめている人物が一人。

765プロダクション所属のアイドル、我那覇響と双海真美であった。

真美「これって所謂テレビゲームだよね」

響「こないだ福引きで当ってきたんだぞ」

机の上には先程一人が話していたゲームソフトの入った箱が一つ置いてあった。

真美「でも凄いよね…いおりん…ゲーム機用意してくれたし」

響「早速やってみるぞー」

真美「つって、ゲーム起動はこいつやって…」

やり方がぎこちない響に代わり、真美がゲームのセッティングを行

つていく。

同時刻、事務所近くの道を歩いていた一人の人物。

765プロダクションのプロデューサーと元・アイドルで新たに誕生したユニット【竜宮小町】のプロデューサー秋月律子であった。

律子「あのライブ以降、また忙しくなりましたね」

プロデューサー「みんなが顔をあわせるのは少なくなるけど、夢に向かって進んでいるからいいと思いますよ」

事務所に向けて歩んでいる一人。

そして、響・真美はゲームを起動させていた。

真美「そう言えばどんなゲームなの？」

響「冒険するものらしいぞ」

と、画面一杯に光が広がり始めた。

すると二人に小さな異変が起こり始めていた。

真美（何だろ・・・ぼんやりしてきた・・・）

響（何か凄そうな・・・ゲーム・・・だぞ・・・）

そして画面に広がっていた光は、画面を飛び出し響と真美を包み込んでいく。

プロデューサー「ん？」

丁度その時、事務所の扉の前に辿り着いていた一人。

律子「テレビの光にしては明るいわね」

そう言いながら事務所の扉を開く律子。

すると先程まで溢れていた光は一瞬にしてなくなっていた。

そして、響・真美の姿も事務所内から消えてしまっていたのだった。

プロデューサー「律子・・・確かに音無さんからの連絡で・・・」

律子「ええ・・・社長と一緒に出掛けることになつて、丁度響と真美の二人が戻つてきたから留守番をお願いしたつて」

辺りを見渡すプロデューサーと律子。

すると、起動したままのテレビゲームに気付いた律子。

律子「こんな物・・・事務所にあつたかしら・・・」

とその時、突然画面に光が映し出され否応なしに律子の瞳の中に飛び込んできた。

律子「えつ・・・」

瞬時に嫌な感じを悟つた律子であつたが、すでに身体に力が入らな

くなつておりその場を離れることができないでいた。

律子（これつて・・・ダメ・・・つ・・・）

プロデューサー「律子！」

と、テレビと律子の間に割つて入つたプロデューサーは律子を画面から遠ざけた。

プロデューサー「こいつかっ！」

そして、コンセントからテレビゲームの電源を抜くと画面の光はツリと消え真っ暗になつた。

律子「・・・つ・・・」

と、いきなりその場に座り込んだ律子。

プロデューサー「律子、しつかりするんだ」

律子「大丈夫・・・だと思つ・・・」

プロデューサーに支えられソファーに座らせられた。

律子（意識の全てが吸い込まれていく感じだつた…）

プロデューサー「…律子、今日事務所に戻つてこれるアイドル達は何人ぐらいだ？」

律子「えつ、えつと…私はこれから竜宮小町の三人と合流して打ち

合わせするからこっちに寄れますけど」

プロデューサー「俺も千早の所にいって打ち合わせがあるから…千早は大丈夫だ」

律子「プロデューサー…何かわかつたんですか?」

プロデューサー「…夜に集まろう…集まれるメンバーだけでも…」

厳しい表情を見せていたプロデューサー。

不安な気持ちを抱えたまま、二人は仕事の為事務所をあとにするのであつた。

## ステージ1・はじまりは…（後書き）

### キャラ紹介

#### 双海真美

双海亜美とは双子で765プロ最年少のアイドル。  
亜美と同じくちょくちょく悪戯を行つたりしている。

亜美が竜宮小町で活動するようになつてからは、個人での活動が増えた。

今回、響と共に最初の異世界到達メンバーとなつてしまつた

#### 我那覇響

#### 沖縄出身のアイドル

自宅で複数の動物達を飼つており、それもあつて動物関連の番組に出演したりしている

動きがよく、ダンスが得意

今回真美と共に最初の異世界メンバーとなつてしまつた

#### 秋月律子

765プロにてかつてアイドル活動を行つていたが、現在は竜宮小町のプロデューサーとして活動

ではあるが、765プロのアイドル達の計らい（主に亜美・真美）でアイドルとしてステージに立つ事も

プロデューサーと共に事務所へ戻つてきた際に、響・真美同様に異世界に引き込まれそうになるがプロデューサーに助けられた

#### プロデューサー

765プロのアイドル達をプロデュースするために活動している

初めのころは色々と大変であったが、信頼関係が作られた現在は忙

しいながらも充実した仕事や生活を送っている

## ステージ2・謎のゲーム

再び静かになつた765プロダクションの事務所。

そして、いなくなつてしまつた響と真美はと言ひと…。

響「ん・・・!？」

と、いきなり起き上がり辺りを見渡す響。

響「！」、「！」だ?」

響が今いる場所は、街の中でも事務所の中でもなく木々が生い茂つた場所にいた。

と、響は近くで倒れていた真美を発見した。

響「しつかりあるぞー」

真美の身体をユサユサしていくと、しばらくして真美が意識を取り戻した。

真美「あれ・・・ひびきん?」

まだはつきりとしない意識の中での、響の存在を確認する真美。

響「！」、「何処だかわかるか?」

真美「事務所でゲームやってたはずなのに・・・」

と、その時頭上の木々の枝葉がガサガサと揺れ始めた。

響「？」

そして次の瞬間、何かが一人目掛けて落下してきたのであった。

-----

現実世界・765プロダクション事務所。

今ここには、四人の人物が揃っていた。

高木社長「うむ・・・それが君の見解か」

プロデューサー「にわかには信じられませんが・・・」

そして心配な表情をしている女の子が一人。

如月千早と音無小鳥であった。

千早「二人とも・・・無事よね・・・」

プロデューサー「千早・・・」

と、いきなり事務所の扉が勢いよく開かれた。

律子「ちょっと、伊織！？」

真っ先に事務所内に入ってきた女の子・水瀬伊織。

プロデューサー「伊織？」

伊織「これが全て悪いんでしょう…こんな物叩き壊して…」

と、ゲーム機に伸ばした伊織の手を小鳥が止めた。

小鳥「本当にこのゲームの世界に飛ばされたのなら、壊しちゃつたら戻つてこれなくなるかもしないんですよ」

伊織「…」

亜美「兄ちゃん…真美は…真美は戻つてくるよね」

プロデューサー「きっと大丈夫だ。何とかする」

高木社長「とはいえる…これ以上誰かが引き込まれては大変だ。皆、これには近付かないよう…」

あずさ「でもコンセントから抜いてあるんだから大丈夫ですよね」

律子「そうね…ただ問題が一つ…」

小鳥「はい…明日からの仕事が…」

プロデューサー「それは俺が話をして来ます。この件については話しても信じてもらえないでしょつから、上手くやって来ます」

高木社長「大変だと思うが頑張ってくれたまえ。私や音無君も出来る限りの事をやってみよう

そんなこんなで、複雑な気持ちのままこの曲を終えるアーティストのプロダクションの面々。

だがこれは、まだ始まりにすぎなかつたのである。

### ステージ3・区切られた世界

現実世界で夜を迎えた頃……。

異世界の響と真美はようやく街に辿り着いていた。

響「な……な……」

真美「ひびきん……無理して【なんくるないさー】って言わなく  
ていいよ」

街についたとたん緊張がとけ力が抜けたのか、その場に座り込んで  
しまった響。

真美「とりあえず休める場所に行こうよ」

と言つ真美の言葉を受けて、街の宿屋で休む事となつた。

響「でもまさかあんな状況になるなんて思つてないさ」

ふと少し前の出来事を思い出す響。

- - - - -

響・真美「ー?」

二人に落ちてきたのは手のひらサイズの魔物だった。

響「ー?」

魔物達を蹴散らしていく響。

真美「・・・やつ・・・」

だが真美の方は次々と来る魔物達を対処しきれずについた。

響「じつとしてるぞー！」

響は粗つぽくも華麗に真美から魔物を取り払っていく。

真美「ひ、ひびきん・・・」

響「こんなのと戦つてられない・・・走るぞー！」

行く先が何処に通じているかわからないが、ただ魔物達から逃げるために木々の中を走り抜けていく一人。

幸いにも魔物達の移動速度は遅く、前方に光が見えた頃には魔物達を上手くまいていた。

響「出口・・・だぞー！」

- - - - -

真美「で、木々を抜けて外に飛び込んだらその先にこの街が見えたんだよね」

響「とにかく・・・お腹空いたぞ・・・」

真美「もう夕御飯の時間だしね・・・」

しかしながら二人はここである危機に直面した。

響「私達のお金が通用しないぞ・・・」

真美「宿は一泊だけならって無料だったから・・・」

魔物達から全力で逃げてきた二人にのし掛かる精神的なダメージ。

?「お前達のような奴等がこの世界の命運を握っているとはな・・・」

真美「ふえ?」

いきなり声がして振り返ると一人の女性が立っていた。

?「試してやる」

と、女性はいきなり真美に向け拳を降りおろした。

真美にヒットする直前、それを止めたのは響であった。

?「中々良い動きだが・・・」

と、いきなり身体の動きを変えると響の腕を取り放り投げた。

真美「ひびきん!」

響「ぐつ・・・」

上手く着地したものの、体力と精神力の疲労はピークを迎えていた。

響「…んなの…なんくる…ないわーー。」

と、最後の力でダッシュし女性の身体に体当たりをぶちかました響。

?「…なるほどな…少しばらめるとしようか」

女性はそう呟くと、力尽き倒れそうになつた響を支えた。

?「宿に連れていく。お前も来い」

真美「えつ…ん…うん…」

田の前で起きている出来事に動搖しながらも女性についていく真美。

そして、夜が明け…。

響「ん…ん?」

真美「ひびきん!」

?「よつやく田覚めか…しかし、食事し終わつた瞬間に意識を失つとは」

響「お前つ…ん?」

起き上がり飛びかかるとした響だが、身体の痛みがそれをとどまらせた。

真美「ひびきん、この人は悪い人じゃないよ」

クリス「自己紹介が遅れたな。私はクリス。伝説に従い旅をしている」

響「伝説って……ワケわからなーいぞ」

クリス「お前達の世界ではそういうな……だが、私の一族が代々受け継いできた書物に記されたもの……この世界に災い起つりし時、異世界より戦士が舞い降りる……とな」

真美「私達が？」

クリス「何も知らずにこの世界を歩かれては危険だ……簡単に説明してやる」

クリスは紙を用意し簡潔にこの世界を説明していく。

響「100のエリアに区切られた世界！？」

真美「……」

クリス「災いを引き起こしている敵は、エリアの最奥……100番目のエリアにいる」

響「100個のエリアを順々に巡るのは大変なんだぞ」

クリス「心配はいらない。その時が来たら説明しよう」

真美「……」

響「真美、元気ないな」

真美「亜美や兄ちゃん達に会いたいなって……」

クリス「……出発しよう……その会いたい人と再会したいのなら速く敵を倒せばいい」

響「やるぞ、真美。やつて元の世界に戻るんだぞ」

真美「……そうだよね……頑張らなくちゃ……」

クリス「と忘れていたな……街を出る前にお前達を強化しておかないとな」

そう告げたクリスなのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9506z/>

---

アイドルマスター ~BattleGirls~

2011年12月31日20時52分発行